

2014年度 国際共同研究交通費補助研究成果概要報告書

別紙可 (A4用紙1～2枚)

所属・職・氏名	経済学部・教授・松枝 法道
共同研究者 所属・職・氏名	ル・アール大学経済学部・教授・エティエン ファルバック氏
研究課題	金融政策の決定における自信過剰の影響：政策と制度の観点から
研究期間 <small>(実際の派遣又は招聘期間)</small>	2014年 8月 31日 ～ 2014年 9月 6日
研究場所	リール第一大学経済学部他

概要 (1000字～2000字程度)

私のランバス留学(2003・2004年度)を契機として、これまでもル・アール大学経済学部、および、リール第一大学経済学部の Etienne Farvaque 教授と継続的に共同研究を行ってきた。現在までにあわせて7篇の論文を学術誌や国際学会において公表しており、代表的な研究成果としては、査読付き学術誌である *Journal of Macroeconomics*、および、*Economics Bulletin* において公刊された論文が挙げられる。

今回の滞在中に行った研究のテーマは、これまでに引き続き、金融政策の意思決定者が自信過剰バイアスを持っている場合にどのような制度的デザインが必要かという問題である。一言で自信過剰バイアスといってもその種類は実に多様で、自信過剰バイアスの影響を受ける経済主体も家計から政策立案者まで大変幅広く考えられる。ここでは既存の心理学、および、行動経済学の文献を参考に、金融政策担当者に見られがちな自信過剰バイアスとして、自らが獲得した経済状況に関する情報が、実際の正確性よりも、より正しいものであるとして行動する「正確性に関する錯覚」、自らの採用した金融政策の影響がマクロ経済により強い影響を残すという「コントロール性に関する錯覚」を採用した。前者については、全く異なる文脈ではあるが、先行研究があるものの、後者については全く依拠する研究がなかったため、その設定に説得力を持たせるため苦心を重ねる必要があった。

また、金融政策の影響を評価する上でのマクロ経済モデルとしては、伝統的な *IS-AS* モデルではなく、ミクロ的基礎付けに裏付けられた、いわゆる「ニュー・ケインジアン型」のマクロモデルを採用した。このフレームワークでは、自信過剰バイアスを持った政策担当者の任期をどの程度に設定することが、社会的な見地から望ましいかというテーマの論文を共同研究として既に完成させている。今回の滞在中には、自信過剰バイアスに加えて、政策担当者が自らのキャリアに関する関心を意思決定に反映させるというモデルの分析を行った。

さらに、最近議論されはじめた、金融政策に対する「景気後退回避」的選好を取り上げ、経済全体の景気後退回避的選好と、政策担当者の自信過剰バイアスがどのように相互作用し、結果的に経済にどういった影響を与えるのかについての理論分析を行った。

今後も緊密に連絡を取りながら、これらの論文を早期に完成させるべく努力していきたい。